文学研究科　日本文学専攻

氏　　名	**深澤　晴美**
学 位 の 種 類	博士(文学)
学 位 記 番 号	乙第2号
学 位 の 日 付	令和3年3月13日
学位授与の要件	学位規則　第4条　第2項該当(論文博士)
学 位 論 文 題 目	**発掘資料を基盤とした川端康成研究**
論 文 審 査 委 員	主査　教授　片山　倫太郎
	副査　教授　中川　博夫
	副査　鶴見大学短期大学部教授　山田　吉郎

【内容要旨および審査結果要旨】

本論文は、新潮社版『川端康成全集』全三五巻補巻二巻（昭五五・二～昭五九・五）に未収録の作品、原稿、文書、書簡等を渉猟し発見した成果に基づく論考であり、川端文学の基礎研究として大変意義深いものである。

著者の深澤晴美氏は、お茶の水女子大学大学院在籍中から、修了後も高等学校で教鞭をとりつつ、持続的に川端康成研究をおこなってきた。川端康成学会（旧称・川端文学研究会）を主な拠点として、当初は作品研究が中心であったが、２０年ほど前の新資料発見をきっかけに研究者が未見の資料を次々と発掘し、論考を重ねてきた。本論文はその集大成の一つである。近年、小谷野敦氏との共著『川端康成詳細年譜』（勉誠出版、二〇一六・八）を編纂、刊行した深澤氏は、川端康成伝記研究の第一人者であり、その学識は本論文にもふんだんに活かされている。

川端康成の中学生時代の投書作品から最晩年の書簡に至る多数の発掘資料（未発表小説、全集未収録・未刊行作品、未翻刻書簡、講演・座談会記録等）に基づく本論文は、三部構成となっており、以下にその目次を記載する。

［目次］

はじめに

第Ｉ部　新発掘初期作品の読解

第一章　未発表小説「星を盗んだ父」
―モルナ―ルの戯曲「リリオム　或るならず者の生と死（裏町の伝説）」翻案の試み―

一　執筆時期の推定
1　用いられている原稿用紙について
2　原作者名「フエレンク・モルナー」の表記について
3　「翻訳全盛時代」とその急速な失速
二　執筆の背景
1　「リリオム」の原型・森鴎外「破落戸の昇天」と学生時代の川端康成
2　川端岩次郎宛書簡（大正九年一一月二五日附）が提示する問題
【演劇との関わり―松竹合名会社と帝大劇研究会―】
【第六次「新思潮」の継承―菊池寛との関係―】
3　商業誌への執筆―水守亀之助・加藤武雄・佐佐木茂索との関係―
4　大正一〇年四月「MERRY―GO―ROUND」の腹案
5　鈴木善太郎訳『白鳥』（大正一三年六月）刊行前後―金星堂との関わり―
6　二冊の幻の著、川端康成訳ジヨン・パリス『さようなら』と川端康成『驢馬に乗る妻』
三　その特質―恋愛ドラマから「肉親の深い神秘な愛情」を焦点とした小説への改変―
1　戯曲「リリオム」の邦訳四種と小説「星を盗んだ父」の懸隔
2　「リリオム」を原作とする映画、ミュージカル「カル―セル」等の作品群と「星を盗んだ父」
四　川端文学の中で―今後の検討課題―

第二章　新聞掲載の発掘作品―「妻競」「時代二つ」「名月の病」「父」―
一　新聞調査の困難性と意義
二　「妻競（つまくらべ）」―「鉢かづき」から「鏡破物語」、ブル―ソフ「鏡」へ／新進作家川端の自負―
三　「時代二つ」―境界としての首つりの松／境界を侵す子供達―
四　「名月の病」―「山猫のやう」な少女と「猿のやう」な妻／名月への昇天―
五　「ちよ物」系譜中での「父」―感傷的な〈私〉から〈彼〉への変貌―
1　〈彼〉の誕生―「生命保険」「非常」から「父」へ―
2　〈彼〉の誕生を促したもの―「ちよ物」と「孤児としての私の私小説」―
3　〈彼女〉の形象に向けて―「父」以後の〈彼〉―

第Ⅱ部　雑誌掲載発掘文等の考察

第一章　投書家時代の川端康成―「文章世界」「文章倶楽部」「新潮」「文芸雑誌」発表一三作品―

第二章　時代との交点を探って―「婦人公論」「中央公論」における川端康成―
一　編集者藤田圭雄との繋がり
二　藤田就任以前―「抒情歌」まで―

三　「牧歌」連載など―満州事変の頃―
四　「愛する人達」連載など―太平洋戦争勃発へ―
五　終戦後―「虹いくたび」連載など―
六　文芸映画の隆盛―「美しさと哀しみと」連載など―
七　『日本の文学』編集、「女流文学賞」選考など
八　ノーベル文学賞受賞以降

第三章　戦前・戦中の少女小説―「少女倶楽部」から「少女の友」へ―
一　「少女倶楽部」時代（昭和七年～一一年）―「大人のための文学なんか、書くもいやらしい」―
二　「少女の友」時代（昭和一二年～一八年）―「軍部にきらわれて」―
1　創刊四五周年「記念のことば」―「みな戦争前のことである」―
2　連載小説「乙女の港」―少女幻想共同体ということ―
3　連載小説「花日記」―続くヒット作―
4　連載小説「美しい旅」―「悉くの作に一貫してゐるもの」―
5　戦争への傾斜の中で―「作文」選など―

第四章　戦時下の一側面―「新女苑」における川端康成―
一　「少女の友」姉妹誌としての「新女苑」―「自己を創造せんとする若き婦人」のために―
二　川端と「新女苑」（昭和一三年～一八年）
1　「小品欄」選―《女性的なるもの》と《日本》―
2　小説執筆―「大牡丹」「旅への誘い」「朝雲」―
3　「岡本かの子」に触れて―《東方の大きい母》を求めて―

第五章　「ひまわり」に見る戦後の川端康成―《少女期の終焉》と少女小説の終焉―
一　巻頭文「美しい言葉」と懸賞少女小説選（昭和二二年）
二　「ひまわり・らいぶらり」誕生、川端責任編集「婦人文庫」復刊（昭和二二年～二六年）
三　少女小説の発表（昭和二四年～二七年）
1　短篇小説「椿」―養女だった妹―
2　連載小説「歌劇学校」―束の間の《少女》の時／歌劇学校という場―
3　連載小説「万葉姉妹」―「あなたとわたしはおなじよ」／「住吉」三部作から「古都」へ―
4　連載小説「花と小鈴」―《永遠の少女》の形象とその背景―

第六章　川端康成の女性文章・綴方選―喪われた〈故郷〉への憧憬／絶対の距離―
一　戦前・戦中の活動
1　「婦人公論」「新女苑」小品欄、『模範綴方全集』の選等―「純粋な肉声」を―

2　「文学の病気」「文学の毒気」―「故郷を失った文学」が提起した問題―
3　『女性文章』刊行と「英霊の遺文」―昭和『万葉集』の夢想―
二　戦後の活動
1　「赤とんぼ」綴方、「婦人文庫」小品の選等―「なほ失はぬもの」を―
2　「雪国」改稿に触れて―フェミニズム批判の彼方へ―
3　「白鳥」廃刊後―自らの創作に向けて―
4　「東方の歌」―幻の《日本》への回帰―

第七章　川端康成と沖縄―幻の長篇「南海孤島」／米国統治下の沖縄行―
一　幻の長篇「南海孤島」―戦前の企て―
二　昭和三三年、米国統治下の沖縄行
1　戦跡の巡拝、民芸の鑑賞
2　沖縄タイムス主催「川端を囲む座談会」、乙姫劇団
3　ハンセン病療養所愛楽園訪問と講演「逢い難くして……」
4　琉球新報主催「川端康成氏を囲んで文学を語る座談会」
5　「タイムス文化講座講演」
三　沖縄行以後の川端と沖縄

第八章　川端康成における芭蕉／「雪国」の《天の河》再考
一　「不易流行」と故郷喪失―初期の評論―
二　「旅の小説」の試み―「牧歌」「旅への誘ひ」「東海道」／「旅情」から「旅愁」へ―
三　捨子の「かなしみ」と旅人芭蕉―「故園」の〈私〉の叫び―
四　「雪国」―《天の河》の加筆と改稿―
五　「しぐれ」―《二人で一人、一人で二人》の願い―
六　美との運遁と創造―「ほろびぬ美」「美の存在と発見」他―

第九章　最晩年の書簡二通
一　新発掘・成瀬記念館蔵上代たの宛川端康成書簡について
―パール・バックのノーベル平和賞推薦依頼に関して／平和への願いと国際的活動―
1　川端とパール・バックの接点―「ノー・モア・ヒロシマズ」／国境・人種を越えて―
2　世界平和アピール七人委員会等における川端の平和活動
3　ノーベル平和賞推薦依頼を断った背景
二　川端康成最後の書簡―「不浄」ということ―

第Ⅲ部　新発掘資料編

第一章　内容見本類に見る川端康成―新発掘推薦文等六五篇・各篇概要と解題―

第二章　文学館・記念館所蔵書簡に見る川端康成―未翻刻書簡三〇六通　解題と一覧―
一　書簡解題
二　書簡一覧

初出一覧
終わりに

なお、本論文の作成に用いられた既発表論文の初出は、以下の通りである。

［初出一覧（目次順、いずれも大幅な加筆修正あり）］

はじめに

1「研究展望　作家研究と年譜―『川端康成詳細年譜』を刊行して―」（「昭和文学研究」二〇一七・三）

2「川端の「推薦文」が映す社会」（「読売新聞」二〇一九・三・二三夕刊）

第Ⅰ部

3「解説・川端康成「星を盗んだ父」」（「新潮」二〇一三・二）

4「川端康成「星を盗んだ父」―執筆時期の推定と執筆の背景」（岩波書店「文学」二〇一二・七、八月号）

5「川端康成「星を盗んだ父」論―その特質と意義」（お茶の水女子大学「国文」二〇一三・一二）

6「解説・川端康成新発掘作品「名月の病」「妻競」」（「新潮」二〇一八・三）

7「川端康成・未刊行作品五篇　解説」（「新潮」一九九二・六）

8「新発掘小説「名月の病」を読む」（「アジア文化」二〇二〇・六）

9「全集未収録　川端康成「父」解題」（岩波書店「文学」一九九二・春季号）

10「川端康成「ちよ物」試論―全集未収録作品「父」を核として」（「文藝空間８」一九九二・四）

第Ⅱ部

11「投書家時代の川端康成―大正五年の掲載作品十三―」（川端文学研究会編『川端文学への視界16』教育出版センター、二〇〇一・六）

12「「婦人公論」「中央公論」における川端康成―時代との交点を探って―」（和洋九段女子中学校・高等学校「紀要」一九九四・四）

＊以下、「紀要」と略す。

13「「少女倶楽部」「少女の友」における川端康成」（「芸術至上主義文芸」一九九六・一二）

14「「新女苑」における川端康成―戦時下の一側面」（「紀要」一九九七・三）

15「「ひまわり」における川端康成―〈少女期の終焉〉と少女小説の終焉」（川端文学研究会編『川端文学への視界13』教育出版センター、一九九八・六）

16「川端康成の女性文章・綴方選―喪われた〈故郷〉への憧憬／絶対の距離』（「紀

要」一九九八・五）

17「川端康成と沖縄―幻の長篇「南海孤島」／米国占領下の沖縄行」（川端康成学会編『川端文学への視界29』銀の鈴社、二〇一四・六）

18「川端康成における芭蕉／「雪国」の〈天の河〉再考―川端康成全集未収録文に触れて―」（「芸術至上主義文芸」二〇一八・一一）

19「成瀬記念館蔵・上代たの宛川端康成書簡について」（日本女子大学成瀬記念館「成瀬記念館」二〇二〇・八）

20「川端康成最後の書簡　「不浄」ということ」（「新潮」二〇一九・四）

第Ⅲ部

21「新発掘・川端康成全集未収録文六五篇―日本近代文学館及び神奈川近代文学館所蔵内容見本類より」（川端康成学会編『川端文学への視界34』叡知の海出版、二〇一九・六）

22「神奈川近代文学館所蔵・川端康成関係未翻刻書簡一八〇通」（「昭和文学研究」二〇一九・三）

23「川端康成関係未翻刻書簡一二二通―茨木市立川端康成文学館・日本近代文学館・北海道立文学館所蔵川端康成書簡来簡等」（「芸術至上主義文芸」二〇一九・一〇）

さて、以下では目次にしたがって本論文の概要を記しながら、論評を加えていくこととする。口頭試問の内容についても適宜記す。

第Ⅰ部第一章では、未発表小説「星を盗んだ父」（肉筆原稿）の発見にともなう執筆時期、執筆の背景、特質等が、多様で周到な文献調査の下に明らかにされている。肉筆原稿への調査研究は、近年まで夏目漱石、宮澤賢治など一部の作家に限られていたため、深澤氏の発見と論考は川端文学研究に新たな頁を開いたと言ってよい。この発見は広くマスコミでも取り上げられた。同作品の多種にわたる翻訳の比較のみならず、新進作家として苦労する若き日の川端を詳細な伝記調査から論述しており、高く評価できるものである。

第二章では、大正期の都新聞・読売新聞・朝日新聞をすべて網羅的に調査し、全集未収録・未刊行の初期作品を複数発見した。それぞれの作品の解題、解釈のみならず、たとえば「父」（「東京朝日新聞」大正一五・一〇・三）は、伊藤初代との破談を綴った一連の「ちよ物」の系譜にある私小説だが、その系譜の中で主人公を客観視できるようになるメルクマールとして位置づけられる作品であることを明らかにした。ただし、口頭試問では、自己客観化を説明する語の用法に若干の不用意さがあるとの指摘があり、再考が促された。

第Ⅱ部は、雑誌を調査対象としている。各誌の調査に当たっては、全集未収録文を含めた川端の文章のみならず、座談会やグラビア、訪問記事、特集、催し物・新連載・近刊の予告類、読者頁、編集後記等も周到に拾われている。

第一章は、小説家を志す中学生の川端が盛んに投稿を試み、各誌に掲載された俳句、短

歌などが新しく発見されている。第二章では、「中央公論」「婦人公論」に掲載された全集未収録文１２篇の発見とともに、中央公論社との生涯にわたる関係を、たとえば編集者藤田圭雄との交流を通して論考している。

第三章～第六章では文芸誌より低いものと見做されてきた女性や子ども向けの雑誌を調査対象としている。雑誌「少女倶楽部」「少女の友」「新女苑」「ひまわり」等において、川端は小説の連載だけでなく、戦前から戦中戦後と、読者投稿の選者として積極的に関わった。全集未収録２５篇の選評等の発見をとともに、少女向け、女性向け雑誌に期待を寄せる川端の文章や生活から、川端文学の核心的な問題である「旅」「女性的なるもの」「故郷」「日本への回帰」などの諸問題に切り込んでいる。ただし、これらは一筋縄ではゆかない複雑な様相の問題であり、口頭試問では、たとえば「女性的なるもの」の多様性をもっと具体的に論証するべきとの意見があった。選評とともに選出された投稿への分析を促すアドバイスもあった。

第七章では、地元紙「沖縄日報」「琉球新報」「沖縄タイムス」などを調査対象とし、戦後の川端の沖縄行について論考している。その行程をはじめとして、現地での座談会・講演等の言葉も拾いあげることで、戦後の川端の社会観、文学観が考察されている。

第八章では、久松潜一・井本農一責任編集『古典俳文学大系』（集英社、全一六巻。昭和四五・三～四七・八）の推薦文の発掘から、川端と芭蕉の関わり、『雪国』のラストにおける天の河の問題が論じられている。これらは、前述の「旅」「故郷」などの問題をさらに追究するものである。

第九章では、最晩年の未発表書簡二通を通して、自死間際の川端の生活と思想、また社会活動への意識を考察している。

第Ⅲ部は、各地の文学館で発見された新資料の一覧である。第一章は、タイトルにもあるように内容見本類６５篇のリストと解題であり、日本近代文学館、神奈川近代文学館所蔵のものである。第二章は、未翻刻書簡３０６通のリストと解題で、所蔵先は茨木市立川端康成文学館・日本近代文学館・神奈川近代文学館・北海道立文学館である。各文学館には無論所蔵リストがあるが、リスト自体が非公開の場合もあり、これらを専門家が一点一点検分し、総合してリスト化し、公開するのは初めてのことである。伝記研究のみならず、文学作品研究にも大いに資することが期待される書簡類への考察は、近年になってようやく研究対象になったのが実状であり、今後の川端研究に資するところが大きい成果である。

さて最後に、口頭試問おける既述以外の審査委員の質問、見解等を記しておく。

「第Ⅰ部　新発掘初期作品の読解」の「読解」の用法について、そぐわないとの意見があり、たとえば「論考」等の方が適切であるとの指摘があった。

第Ⅱ部第一章において、短歌俳句の発見は、署名が本名ではないため、中学時代の日記等の詳細な調査から確定されており、高く評価された。一方で、その歌風、俳風にもっと言及すべきとの意見であった。

『雪国』について、男性性・女性性という用語での考察がなされているが、その用法、定義に疑問が提出された。

第Ⅲ部について、古典文学研究ではさらに詳しい解題の記述が要求されるとの意見があった。深澤氏はこれに対して、プライバシー、著作権、また所蔵機関の意向等の観点から、私的な書簡の公開には一定の困難があるとの応答があった。

また、本研究は時間と労力を多大に要するものであることは確かであり、これを持続的に遂行し、かつ、そこから川端文学研究の核心に迫る論考は評価に値するとの意見表明があった。

総じて、各審査委員は、本論文の学術的価値について高評価であった。

【最終試験の結果】

良好であった。

【専攻学術に関する試験（口頭）】

良好であった。

【審査結果】

以上の審査の結果、当該論文は博士（文学）の学位を授与するに相当であると認められる。

以上